



あさひ福祉作業所にて実施する 「三年目職員研修」について

小磯 満（社会福祉法人雲柱社所属）

当法人に就職して三年目が過ぎた職員は、春は5月ごろ・秋は9月ごろ、あさひ福祉作業所において二泊三日の労働体験（学習）を受けていただきます。この研修は10年程前に企画されて以来、一度の中止もなく毎年継続されています。

なぜ三年目の職員に「あさひ」での体験・学習なのか、ということに明確な答えはないのですが、「石の上にも三年」後の仕事は、ただただ頑張る辛抱することよりも、職員自身の自立と他の職員との連帯（チームワーク）を前提とした、仕事の質を高めることが求められ、そのために、自分の生き方を見直してもらえようような体験が必要になる、と考えて「あさひ」が研修場所に選ばれています。

作業内容は、田植え・稲刈りが中心ですが、鶏の世話や時には建築請負のような仕事もあり、絶えず緊張感に満ち充実感のある労働になります。

また、夜には座学で難解なテキストを相手に二時間余りつき合ってくださいますので、大概の職員は途中で舟をこぎ始めます。きれいな星空が観られる時には暗い夜道の散歩も一時の息抜きになりますが、早朝から食事の準備やラジオ体操が予定され、嫌でも夜はぐっすり眠ることになります。

三日目が終了するころには参加したほとんどの職員の表情が和らいで、さぞかし辛い研修これで帰れる安堵のためか、と思いきや、後日提出してもらおうレポートを読むと、「あさひ」での体験が職員の心のなかで何かの気づきを与えて下さり、これからの生活・仕事に対しての新しい意気込みにつながっているように思います。

少々長くなりますが、以下に職員のレポートの一部分を紹介させていただきます。

「養鶏は正直、本当に嫌だと思っていました。入るのも怖かった鶏小屋ですが、一度入ってしまえば少しずつ慣れてくることができました。鶏が卵を産み、温めている…そんなところから卵を取ってくるのは正直怖かったですが、『命をいただく』ということのを改めて考える機会となりました。」

「同じ時間、同じ目標を持ち、同じことを行うだけで会話は生まれ、仕事の辛さも共有しそしてその人その人の状況（女性だからとか体調が悪そうだからとか・・・）

を理解した上で仕事を分け合うことが自然と出来ていくのだということを知りました。」

『食育の原点』を見せてもらった。食を語るには程遠い程度だが、スーパーに並んでいるもの一つ一つに今回見たような風景があることを心に留めておきたい。人間が生きていくということは、いつでもきらびやかで清潔なばかりではない。」

「あさひ福祉作業所は『自分のできることをやる、もてる能力を最大限に使う』ということを大切にしているということを知りました。『自分の効率的なやり方』と『あさひの利用者さんのやり方』は、時間は違ってもたどり着くところは同じ、自分はどんなに傲慢なのかという話を聞き、とても身に染み痛感しました。私は、普段の調理室では、いかに時間内に効率よく作業をするかを求めて、気を張り詰めていて、時には相手に（強く）求めてしまうこともありました。・・・効率よりも、自分ができることをやることや、みんなと協力して作業する。作業後の『お疲れ様でした、ありがとうございました』のあいさつが普段交わしているものより、ずっと身に染みるものでした。」

「経験の大切さを知った。テレビを見たり人の話を聞くことで色々な経験をした気になっている自分がいたが、自分の体で実際にその場所に行って作業して、初めて気づくこと、知っていたつもりのことでも体験の中で感じることは自分の中でもやはり大きい。これからも積極的に沢山の経験をして自分の糧にしていこうと思った。」

「どの作業でも強く感じたのは、『食べ物へのありがたみ』である。普段自分が食べたいと思う時、スーパーに行けば『普通』に手に入る環境の中で生活していて、その便利さがあたりまえになっていた。しかし、自分が思っていた『普通』というのは、それをやってくれている誰かがいることで成り立っていて、ものすごい時間と作業を要しているのだということを知ることが出来た。苗を1本1本植えてそれを収穫しご飯が食べられること、鶏を日々飼育して卵が食べられること、じゃがいも、椎茸等、それ（作業）に携わったからこそ感じるものは大きかった。」

「えさ、水やりで始めは小屋に入った瞬間にバタバタと鶏が急に飛び立つのが怖く、外から様子を見ていたのですが、自分から入らなければ何も変わらないし、命が回っていかなくなってしまうと思い勇気を出して小屋の中へ入りました。鶏が驚かないように、こちらも急に動いたり驚かさなければ大丈夫と教えてもらい、なるべくそっと歩き飛ばないように歩き大丈夫でした。怖くても一歩踏み出すことが大切な

のですね。」

「卵の収穫をお手伝いした際、ある同期が『卵一つ生むのにどれだけ苦しいのだろう』と言っていた。まさにそうで、渾身の力を絞って生んだ卵、自分はどれだけいただいていたのだろうと改めて思うと恥ずかしくなってしまった。食事の前の『いただきます』という言葉。普段何気なく通過してしまっている感謝の気持ちを今回痛感させられた。」

「この研修では時間の余裕が心の余裕に繋がり、その笑顔が人の心を温かくするということができた。作業所での生活はとてもゆったりとした時間が流れていて、日常の生活で感じている一日と同じ時間を過ごしているとは思えないほどであった。それは常に何かに追われ、駆け足をしながら過ごしているような都会の雑踏の中ではあまり意識が向かない自然に目や耳を傾けることが出来たということもある。」

「現在の生活は、仕事をしてお金を稼ぎ様々な物を買って生活をしている。しかし、あさひ作業所で鳥の世話や田植え、椎茸運びの仕事をしていると、お金を稼ぐために働くというより生きていくために仕事をしているのだと感じた。様々な仕事があるけれど生きるために必要な野菜やお米を作り、鳥の世話をし、命をもらいながらも自分が生きているんだということを身近に感じた。」

これからも三年目職員研修でお世話になります。あさひ福祉作業所のみなさまのご健康を心よりお祈り申し上げます。



高森草庵は、あさひテレサホームから車で20分位のところにある長野県富士見町にあるカトリック教会です。私は20年前から草庵を訪れ、洗礼に使われるこんこんと湧き出る泉に、静かなたたずまいにいつとき身を置き、心の安定を保っていました。この草案に渡邊修道士が訪れておられます。

今回は、草庵への渡邊修道士の思いを3.11の原発事故を軸にしたお便りを、掲載させていただきます。

島 武代

深まりゆく高森草庵の存在意義の一断面

聖ドミニコ修道院 渡邊 裕成



余分なものを一切捨てて神様とだけに生きたいとの、押田神父の内からの願いがあり、その願いに誠実に生きようとしたところから生まれてきた高森草庵。今年は、その押田神父が帰天して10年、来年は高森草庵が始められて50年だそうです。高森草庵といううなものが生まれてきた不思議、また押田神父が亡くなってからも10年もこれが続いた不思議を思い、神様に感謝します。

今、高森草庵には生前の押田神父を知っている人たちがちらほら訪れる以外にも、押田神父を知らない人たちも訪れ、現代のこのときを生き抜く上での、何か大切な指針を受け取って行っているようです。混迷の深まりの中にあって、草庵の存在意義が増しているのを、ここに集うもの、感じています。この50周年というときを契機に、古くからの人と新たに草庵に来ている人とが一堂に集う場を持つのはどうかとの声もありましたが、‘キリストはきのうも今日も、始めも終わりも時間も永遠も、彼のもの’なのだからと、50という数字に意味を持たせ、記念行事をやるよりも、今このときの必要に応じて行こうと話合われました。

私が高森草庵で営まれているような生活に最初に関心を持つようになったのは、1980年代の半ばにネパールで2年半生活をした時のことです。私は、メリノール会の信徒宣教者として、カトマンズにあるチベット難民キャンプの中の小学校で算数を教える手伝いをしていました。大量生産大量消費の日本での生活が染みついていた私は、ネパールでの生活に慣れるまでの最初の半年は苦しみました。しかし、慣れてくればこちらの方がずっと人間らしい生活であると思うようになりました。

ネパールにて聖書を読みながら、日本の社会を見ると、日本がソドムとかゴモラ

とかと重なって見えました。ひとつの例をあげると、ネパールでの生活ではゴミが出ませんでした。特に、紙やビニールなどはゴミにはならず、みな幾度も繰り返し使っていました。仕事でネパールに来ていた、ある日本人家庭の奥さんがこんな話をしてくれました。「恥ずかしくてゴミも出せない。私たちが出したゴミの中から、ネパール人は見て、みんな持って行くんだから。」日本人が出すごみはネパールの人たちにとったら、生活必需品。私はこれを聞いて、私たち日本人はこの人たちの血と汗をごみにし、捨てているのだと思いました。

ところで、当時、ネパールは世界最貧国ではありましたが、隣接するインドなどとは違いスラムがなく、飢えで死ぬ人もいませんでした。それは、ネパールでは90%以上の人々が、農業をしながら食物とエネルギーを自給自足していたからです。田舎での生活は厳しいものではありましたが、田舎にいて土地を耕してさえいれば、人は生活することはできていました。自分の手で土地を耕し食べて行くことの大切さを学びました。

その後、日本に帰り神学生となり、同僚の神学生を通して高森草庵を知りました。そこには、人々がキリスト教徒も仏教徒もヒンドゥー教徒も共に集い、共に祈り、共に働き、自分たちの手で田畑を耕し、糧を得、生活していました。このような場が日本にあることに驚きました。

そして、私は司祭となり間もなく、移住労働者のために働くようにとの任命を受けました。彼らは本国での生活が苦しく、日本に来て働き、本国にいる家族に仕送りをする。でも、仕送りをしていても際限がなく、そんなことを続けているうちに家族が崩壊してゆくケースが多くありました。そんな中から、自国に帰って自給自足の生活が出来る様に目指すプロジェクトが移住労働者たちの中から生まれました。私は彼ら移住者と共に働いているうちに、私自身も自給自足の生活を具体的にはじめて行きたいとの強い願いが起きました。

今では地球規模の環境破壊が世界的な問題となってきました。「持続可能な社会」だとか、「持続可能な経済」だとかいう言葉が言われるようにもなりました。すなわち、私たち先進国のものが今の生活をそのまま続けたら、地球がもはやもたないということが次第にあきらかとなってきたのです。本来、人の生活も自然の循環と、ある調和の内にはありましたが、大きな問題となっています。自然循環と調和ある生活をどのように実現するかという課題がつけつけられています。そんな点からも、食物とエネルギーを出来るだけ自給自足で生きる生活が顧みられています。

このような中で、押田神父が言っていた次の言葉が私の内で響いています。「本来経済というのは、必要のあるところに本物を、出来るだけ効率的に与えるものである。しかし、現代社会では、必要のないところに代用品を、人々の欲望を駆り立てて、与えている。これは、人間破壊の道だ。こういった狂った世界にあって、私たちのできることはなにもない。意識の表層であれこれ考えてやっても無駄だ。私

たちに出来ることは、根源に立ち帰ることだけだ。」

2011年3月11日には、私は韓国にいました。その一週間後に、韓国での研修を終え日本に戻りました。日本に戻ったばかりの私は、比較的に関心があり、またドミニコ会は東北地方に縁があるということもあって、被災地へ特に福島方面へ出かける機会が良くありました。その頃は、ミサの説教の準備にと聖書を読む度に、原発のことが聖書と重なり、そして時にはまたそれと、高森のこととも重なってきました。

マタイの18章に、ペトロの「兄弟に対して何回まで許すべきでしょうか」との問いに、「どこまでもゆるしなさい」とイエス様が答え、王さまのゆるしと仲間同士のゆるしの譬えを語っているところがあります。

それは、神様のゆるしと仲間同士のゆるしのことでしょうが、一万タラントンの借金と100デナリオンの借金です。1タラントンは6000デナリオンなので、6000万デナリオンと100デナリオン。また1デナリオンは労働者一日分の給与に当たるので、6000万日分の給与と100日分の給与。借金を返すのに、1000日働いて返さなくてはならない借金も大変だけれども、6000万日というと、16万年か17万年くらい。神様に借金を返すのに、10数万年も働き通しに働かなければ返せないと思うと、重苦しくなってきます。

しかし、実はこれは、神様に対してある借金ではなくて、神様からの無償の恵みなのでしょう。神様から、10数万年分の、否それどころか際限のない無償の恵が私達に与えられているというのが、本当のところなのでしょう。そして、仲間同士の間も、本来は貸したり借りたりの間柄でなく、無償に与え合い、生かし合う間柄なのでしょう。

ところで、神様に対する10数万年の負債という、イエスさまのこの譬えを思いめぐらして、現代に生きる私達は、これから生まれてくる世代の人達に10数万年の負債を押しつけてしまったのだとの思いになります。何を言っているのかというと、核のゴミの話です。

「10数万年後の安全」という映画を多くの方がごらんになったと思いますが、私も原発事故後まもなく上映されているのを観ました。原発を動かすことによって生じる核のゴミの最終処分場をまだこの国も完成させたとこはないが、ただフィンランド政府だけが、最終処分場の建設の具体的プロジェクトを立ち上げ、核のゴミを10万年間閉じ込めておく計画だという。このプロジェクトを取材し制作したドキュメンタリー映画です。

この映画では、この最終処分場建設プロジェクトの問題点をいろいろと浮き彫りにしていています。まず第一に、人類はいまだかつて10万年もの間もつ建造物の建築に成功したことはなく、この最終処分場が10万年もつとしたら、それは

人類史上初となる快挙だということです。それからこの核のゴミは、私達が原発を動かし、そこから電気を取り出し使ってきたがために生じたゴミであるけれども、これを安全に閉じ込めて置くためにも当然電気が必要となる。そしてそれは私達が核のゴミを出す間に使ってきた電気量より、はるかに多い電気量がかかるけれども、それをどうするかという問題等々です。

それと、これはフィンランドのこのプロジェクトの問題というよりも、日本に置き換えた時の問題ですが、最終処分場は地中深くに建設される計画ですが、少なくともそこがこれから10万年は安定した地盤でなくてはならない。幸いフィンランドには20億年安定している岩盤というのが地中深くにあって、そこに建設する予定なのですが、日本には10万年も安定している地盤がないということです。その日本列島には、今まで原発を動かしながら出してきた核のゴミが広島型原爆の120万個分にも相当するものが、すでにたまっていて、最終的な行き場もなくあるということです。私達は10数万年分の負債を次の世代に押し付けながら生活してきたのです。そしてこの度の原発事故で外に漏れ出したのは、政府発表によると、その中の680個分だと言いますが、それがこれ程の被害を人々に与え、与え続けています。

私たちは今、本当にとんでもない、狂った時代を生きているのだと、つくづく思います。イエスさまは神様のゆるしの例えとして、100日分の負債と10数万年分の負債の例えを使いました。もちろん神様からの恵は限りないものですが、イエスさまが神様のゆるしの例えとして用いた、10数万年分の負債を私たちは次の世代に押し付けて生活しているとは・・・

「こういう狂った世界にあって、私たちに出来ることは、根源に立ち帰ること」
根源に立ち返る道行きを皆さまと共に歩んで行けますように。

今 思うこと

NPO あさひ 理事長 島 武代

あさひを訪れて下さる方は大勢おられます。なぜ“あさひ”なのか・・・とふつと考えてしまいます。

無償のやさしさを彼等からいただく、又、無償のやさしさを彼等に与える。このつながりが人としてのやすらぎになるのでしょうかねー。

今の世の中、欲と利益追求におわれ、心の平静が保ちづらくなっていると思います。ある日の新聞に、技能訓練生として海外から受け入れ、技術を身につけ母国で生かしていく制度ですが、ある職場では、昔の女工哀史に出てくるような長時間働

かせ、パスポート・通帳をとりあげ、逃げ出さないようにしています。これは日本での事実です。同じ日本人としてとても許せないです。

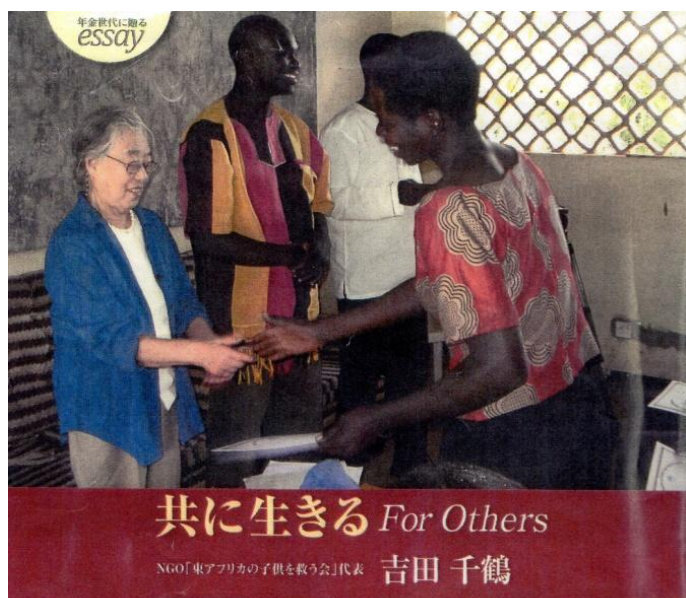
又、集団的自衛権を行使して、日本を守り、安全な生活を保障します、と政府は主張していますが、戦争をするということですね。戦争とは殺し合いです。このようなことをしてなぜ日本が安全なのでしょう。かー。

憲法 9 条を前面に出し、平和外交を押しすすめることが切に切に重要だと思うのですがー。

私の尊敬する吉田千鶴さんは、60才から紛争の絶えないアフリカに出向き、自立のために、身を粉にして働いてきました。

85才の時ウガンダでの職業訓練校での卒業式の祝辞での一部を掲載させていただきます。

平和を願う気持ちが切々と伝わってきます。



戦争は願わなくてもやってきますが、平和は願わなければやってきません。テオノコの内側には平和への願いでいっぱいでした。そしてその願いが外にあふれ出て平和がやってきたのです。光が闇を駆逐するように平和が戦争を駆逐したのです。貴方たちの小さなテオノコが大きな戦争に打ち勝ったのです。

職業訓練校で卒業証書を渡す著者

大人たちは銃を鋏に持ち替えて働き始めました。あなた方も握っていた手を開いてペンをとって訓練校で勉強しましょう。字を覚えましょう、計算を覚えましょう。マシンガンの音の代わりにソーイングミシンの音を鳴らしましょう。カタカラカタカタ。あなた方が作った洋服がグルで着られ、カンパラで着られ、アフリカの色々な場所で着られて、やがて世界の国々で着られるようになるのです。平和って素晴らしいですね

私は今年で85歳になりますが、まだまだ勉強をして、もっともっとあなた方の為に働きます。そして天国に召されたそのあともこの地に光を送り続けることを約束します。

第3回ホームコンサートのご報告

とく先生

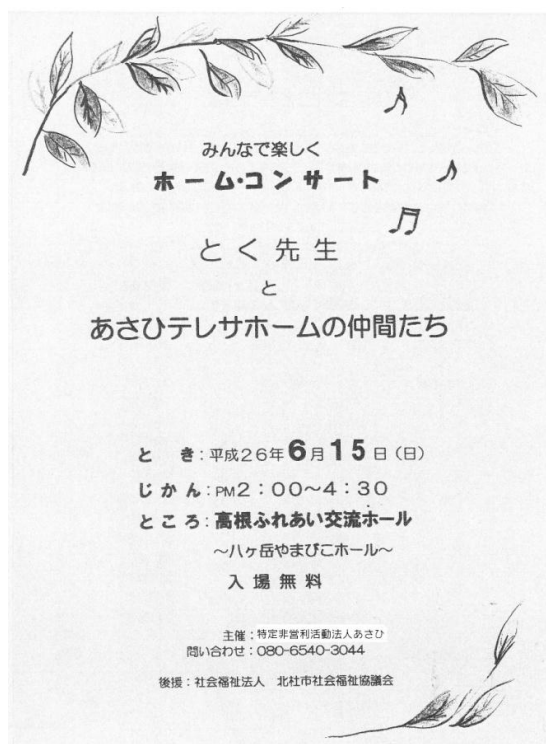
と

あさひテレサホームの仲間たち

あさひテレサホーム 中山 正博

今年もこのような形でホームコンサートを開催できたことは、支えていただいています多くの支援者の方々のお陰以外のなにものでもなく、この場をお借りして皆様に御礼申し上げます。第3回目ということで内容的にも充実したものになり、あさひテレサホームの利用者のみならず“仲間”たちの発表の場としても意義深いものになってきました。

第4回は2年後の開催になりますが、練習を重ねてよりよい楽しいものにしていきたいと思っております。ありがとうございました。



田中 よし子さん



伊藤 裕子さん



成田 昌代さん



プログラム

グループホーム、NPO 法人あさひテレサホームで暮らす障がい者たちによる楽しい音楽会です。吉村とく先生の指導するピアノや歌の、日ごろの練習の成果をお聴きください。毎日の仕事や作業のあいまをぬって、楽しみに練習に励んできました。同時に、賛助出演者の手話ダンスや独唱、さまざまな楽器の演奏もお楽しみに。一緒に楽しいひとときを過ごしていただければ幸いです。

- | | | |
|-----------|--|--|
| | 司会・進行 | 谷 美美子 |
| 始めのことば | 吉村とく（ピアノと歌唱指導） | |
| 1. 手話ダンス | 世界にひとつだけの花 | 阿部多恵子 |
| 2. ピアノ独奏 | メリーさんのひつじ
かっこう
赤いとりこり
七タさま
イエスタデイ | 南 建司
伊藤裕子
田中よし子
麻川理恵
市村 明 |
| 3. 独 唱 | 一中田喜画の童謡集よりー
どっこいしょ
仔馬の目
シャベルでホイ
かわいいかくれんぼ
タ方のお母さん
お月さんと坊や | ピアノ伴奏：吉村とく
衣笠春子
阿部多恵子
関 弘子
馬場真理子
佐藤美代
島 武代 |
| 4. オカリナ合奏 | オカリナ・アンサンブル： パープル・エコー
アニーローリー / ハーバーライト / 荒城の月 | |

ちょっとお休み

- | | |
|----------------|---|
| 5. 三味線と端唄 | 田辺征子 |
| 佃流し / 都々逸 | |
| 6. ケーナとチャランゴ演奏 | フォルクローレ： こだま
花祭り / 浜辺のうた ほか |
| 7. フルート演奏 | 成田昌代 |
| 荒城の月 / 千の風になって | |
| 8. リコーダー合奏 | リコーダー・アンサンブル： 楽太
さくら / フニクリフニクラ / 花笠音頭
ガリアルロ（パロッド曲） |
| 9. 楽器演奏と合唱 | 指揮：中山正博
フルート：成田昌代・涌井洋子
ピアノ：吉村とく
ごきりこ節 / 線路は続くよどこまでも / ピクニック
雨のち晴レルヤ / 今日の日はさようなら |
| 演奏 | 市村明・岩崎幸一・小林徹・笹尾宏一・守屋勝
麻川理恵・大野花奈子・伊藤裕子・佐藤恵美子
田中よし子・保田真木・南建司・峯崎由美
阿部多恵子・衣笠春子・佐藤美代・島武代・関弘子
馬場真理子 |
| 合唱 | |
| 10. みんなで歌いましょう | 幸せなら手をたたこう / 花は咲く / ふるさと
おわりの言葉 島 武代（あさひテレサホーム理事長） |



市村 明さん



南 建司さん



浅川 理恵さん



衣笠 春子さん



阿部 多恵子さん



関 弘子さん



馬場 真理子さん



佐藤 美代さん



島 武代さん



パープルエコー



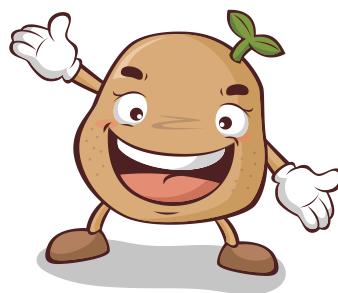
田辺 征子さん



フォルクローレ こだま

◎じゃがいもが収穫されました！！

4月12日の**春の交流会**で種まき体験で植えられたじゃがいもが無事収穫されました。数量に限りがありますが、3kgパックご希望の方にお送りすることになりました。ご希望の方は、お名前と送り先を明記の上、メールかFAXでお申し込み下さい。おって順次発送いたします、無くなり次第終了としますのでお早目にどうぞ！（着払い発送となりますので送料はご負担下さい。）



退任及び新任スタッフのご案内。



馬場春夫さん（あさひ福祉作業所6月退任）
9月からは、月数回宿直勤務（あさひテレサホーム）
のスタッフとなります。



遠藤栄一さん（あさひ福祉作業所7月新任）
馬場さんの後任の指導員として勤務されています。

次回のあさひ交流会は： ◎日時 平成26年12月13日（土）

（もちつき大会）

午前10時～午後2時

特定非営利活動法人あさひ

あさひテレサホーム

〒408-0002 山梨県北杜市高根町村山北割 86-6

<http://www.asahi-teresa.com>

TEL 0551-47-3950

FAX 0551-47-4414

asahi-fukushi@cd.wakwak.com

賛助会費・寄付金等

★郵便局振込★ 00220-1- 98254

編集者：中山 正博